

# 電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

## 第四回

### 第四章 新入社員

1

日本に戻ってきて驚いたことがある。それは身内から散々悪口を言われていたことだ。

まだまだ学ぶことが多く、もつとアメリカに滞在していたかった。しかし、北海道炭礦鉄道たんこうに入社するようにとの福澤先生のご指示に逆らうことはできないため、帰国した。

だが先生のご指示には、別の意味も含まれていたのだ。

義兄の捨次郎すてじろうが先生に、私の悪口を手紙で書き連ねていたのである。そして彼は、一足先に帰国して、婚約者のふさにも私の悪評を吹き込んでいたのだ。

私がボストンのダンマー・アカデミーに入学した時のことだ。  
ボストンは、アメリカの中のアメリカとでも言うべき地だ。一六二〇年にイングランドの宗教弾圧から逃れるために清教徒たちが、ボストンの地に辿り着いた。その時からアメリカの歴史が始まると言ってもいい。

従って非常に伝統に厳しく、また典型的な白人社会である。その地に住む白人たちは、ボストンに強く誇りを持っていた。

私は、日本人にしては西洋人っぽく彫りが深い顔である。それでも彼らに比べると平べったいし、肌の色も白くはない。

白人、黒人、アジア人などの黄色人種など、肌の色はそれぞれ異なっている。なぜこんなに違うのかは知らないが、人間性には全く関係のないことだ。

アメリカは奴隷解放をめぐって、南北に分かれて戦争をした。勝利したのは奴隷解放をうたう北軍である。戦争が終わったのは二十五年ほど前、慶應元年（一八六五）のことだ。

これでアフリカなどからアメリカに連れて来られた黒人が奴隷の身分から解放され、白人と同じような立場になることができたかと言えば、そうではない。

相変わらず白人と黒人とは、レストランから学校、乗り物まで全てが区分されている。差別は続いていると言つていいだろう。黒人

が、アメリカ社会で確かな地歩ちほを築いていくには、まだまだ長い時間が必要ではないだろうかと思わざるを得ない。

人間を肌の色で区分し、上下を決め、差別するなど愚の骨頂だと思えるのだが、日本でも徳川幕府が倒れ、明治政府ができるまでは身分制度があり、生まれで差別があった。

武士階級に生まれれば、どんなに無能であっても藩などで役職にありつくことができる。一方、農民階級に生まれれば、どれだけ有能であっても農民のままだ。

しかし武士階級に生まれても上級武士の家に生まれるか、下級武士の家に生まれるかで、担う役職が違ってくる。

上級武士の家に生まれたというだけで、藩の重責を担うことができる。下級武士に生まれた者は、無能な上役の下で、悶々もんもんと歯ぎしりしなければならぬ。

下級武士の家に生まれた福澤先生は、世の中のこんな仕組みを放置していれば、日本の発展はないと考えられたのだろう。

『学問のすすめ』において、

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり」と宣言されたのである。

福澤先生が意図されたのは、人は生まれながらにして平等だが、学問を修めなければ、社会的な差はつく。世に出たい青年は学問に

励めということだ。

私は、川越の水のみ百姓の息子である。もし徳川幕府が続いていれば、学問を志したとして福澤家の養子となることも、アメリカ留学することも夢のまた夢であったに違いない。

明治元年（一八六八）に生まれた私は、明治の新しい世の恩恵を受ける幸運と共に生きているのだと信じたい。

その意味で、私が福澤先生の言葉に加えるなら、「運」も大切にせよ」だろうか。

さて、私に関する悪評のことだが義兄捨次郎は、私がダンマー・アカデミーの学長に可愛がられ、彼の自宅に招かれたり、彼の家族と会食したり、彼の娘と馬車に同乗して郊外に散策に出かけたりしたことを不快に思っていたようだ。

妹であるふさの婚約者にあるまじき行動だというのだ。

この行動に関して文句を言われるのは、不愉快である。アメリカに来たら、アメリカ人を学ばねばならないということを経に銘じて行動していただだけである。

日本からの留学生は大勢いる。皆、富豪の子弟たちだ。しかし彼らの多くは、日本人同士で固まっている。「ムラ社会」を形成して、そこで楽しく遊び、学んでいる。アメリカ人と交流しようという者は少ない。

私は、それではいけないと思った。せっかくアメリカに留学させてもらったのだ。アメリカ人と親しく交流し、彼らの考え方などを知ることは、ある意味、学問以上に必要だろうと考えた。そして人脈である。後日、日本で何かしらの事業を始めるにしても、アメリカで築いた人脈が生きる機会があるに違いない。その時、慌てて人脈作りにいそしんでも手遅れなのである。

私がアカデミー学長に気に入られ、ボストンのアメリカ人社会で人脈を築こうと努力しているのを、遊び惚ほうけていると誤解されてしまったのは残念である。

西欧人風の顔立ちをしているとはいえ、私はここでは劣等国民扱いの日本人である。その私が、どれだけ人脈作りに努力していたのか、捨次郎は理解していないのだ。

しかし、捨次郎を誤解させた責任は私にもある。それは大きな悲しみから逃れるために、一時期、酒に溺おぼれたことがあったからだ。

その悲しみとは、両親の死である。留学した明治二十年（一八八七年）十一月に、以前から体調を崩していた父紀一が亡くなった。その翌年、父の後を追うように母サダが亡くなったのである。共に四十八歳だった。

父母の相次ぐ死。留学を途中で終えて、帰国したいとどれだけ思ったことだろうか。しかし福澤先生の期待を裏切るわけにもいか

ず、異国の地で悲しみにくれるしかなかった。

父の死も私を打ちのめしたが、母の死がそれに追い打ちをかけた。父の不調は以前からのものであり、それなりの覚悟はしていた。しかし母の死は、予想だにできなかった。

私は、母に約束をしていた。母は、私が福澤家に養子に入ること喜びつつも、深い失意に沈んでいた。

母は、私が貧しさから抜け出し、世に出るために福澤家の養子になることを承知したものの、本音は悔しさ、無念さなどの負の気持ちを強く抱<sup>いだ</sup>いていた。

その気持ちを十分に理解していた私は母に、必ず岩崎の家名を上げてみせると約束したのである。ふさと結婚し、福澤家の養子になることは、あくまでそのための方便であると納得させたのだ。

その約束を果たす機会が、もはや永遠に失われた。私の失意のほどがわかるだろうか。

私は、何もかもが虚<sup>むな</sup>しくなった気がしたのである。そこから逃げるために酒や遊興に溺れた時期があったことは事実だ。

そのために福澤先生から支給されていた生活費を使い果たしてしまい、捨次郎に多少の金銭の借用を願<sup>ねが</sup>い出たこともある。

捨次郎は、私を慰<sup>なぐさ</sup>め、快く借用に応<sup>こた</sup>えてくれたのだが、その裏で批判していたのは納得できない。

しかしながら、アメリカでの生活は、私の考え方、生き方に大きな影響を与えてくれた。

まず、パンを得なくてはならない。自分で稼ぎ、それなりの財産を築くことで、アメリカでは尊敬を得られる。パンを得た上で、精神的な充足を図ることだ。パンを得る手段も持たない人間では信用は得られない。

日本に帰ってきた以上、私はパンを得る仕事に就かねばならない。福澤先生は、私を北海道炭礦鉄道会社に入社させた。勤務地は北海道の札幌である。

この会社は、福澤先生が設立に尽力された会社であり、入社には何の問題もない。しかし東京から遠く離れた北海道である。なにもそこに勤務させなくてもいいだろうと、思わないでもなかった。

それに单身というわけにはいかないから、ふさを同行させることになる。

ふさとは帰国後、すぐに結婚式を挙げ、晴れて夫婦になった。明治二十二年（一八八九）十一月である。ふさは十九歳、私は二十二歳だった。

私が不満に思ったのは、この結婚はふさが強く望んだものであったにもかかわらず、式があまりにも簡素であったことだ。

私は、福澤家の婿むことして歓迎されていないのかと感じた。しか

し、折角のハレの日である。悪い方に考えず、思い直すことにした。なにせ私は父母をほぼ同時期になくしているのだ。本来なら喪もに服し、結婚式を延期せねばならないところである。

式を早く行いたいと望んだのはふさである。ふさは、私の心変わりを恐れたのだろう。

そしてふさの気持ちを察した福澤先生は、式を急ぎ、私を何かと誘惑の多い東京から離すべく、北海道の地を選んだのに相違ない。

「ふさ、私と北海道に行ってくれるのか」

私は、式の後、寝屋ねやでふさに聞いた。

「はい。私は、桃介ももすけさんの妻になりました。ご一緒にどこにでも参ります」

ふさは、優しく微笑ほほえんだ。

「北海道は、寒くて、東京ほど生活も便利ではない。勿論もちろん、友達もいなければ、観劇などの楽しみもない。それでもいいのか？」

「はい。承知です」

私は、ふさが愛おしくてたまらなくなった。

「ふさ、何も心配することはない」

「わかっております」

「ところで……ふさ」

「はい、なんでしょうか」



ふさは、まっすぐに私を見つめた。思いのほか、強い視線だったため、私はたじろぎ、言葉に詰まった。

ふさが出立のときの貞奴とのかを気にしているのではないかと思っただが、この場で貞奴の名前をあからさまに口にしていいものか、迷ったのである。

「私は、桃介さんを信じています」

ふさは、はっきりと言った。

「わかった。これからよろしく頼む」

私は、ふさを抱きしめた。ふさは目を閉じ、私に体を預けた。

ふさはどんなことがあっても私を離さないに違いない。私は、ふさの固く閉じた体をゆっくりと優しく開きながら、この女性も運命の女であると思った。

## 2

北海道炭礦鉄道は明治二十二年、堀基ほりもとが創立した会社である。

この年に私はふさと結婚したのであるが、入社する会社も初々しいういういものだったのだ。

堀は、北海道庁に勤務していたが、北海道の将来に大きな期待を抱き、発展させるには石炭と鉄道の事業をもっと活発にしなければ

ならないと考えた。そして、それまで官営幌内鉄道ほろないを運営していた北有社の事業の払い下げを受けることを計画した。

堀は、福澤先生に相談を持ち掛けた。というのは、北海道の官有物などの払い下げに関しては利権が渦巻き、世間の批判が高まっていたからだ。明治十四年（一八八一）には、北海道開拓使官有物の払い下げが中止になった事件もあった。

そこで、利権の臭いのしない福澤先生を絡からませることを考えたのだろう。福澤先生は堀を支援し、渋沢栄一しぶさわえいいちなど有力な実業家を紹介した結果、円滑に払い下げが行われた。こうして設立されたのが北海道炭礦鉄道である。言うなれば、福澤先生の尽力が無ければ、誕生しなかった会社なのだ。

そのため私を入社させ、破格の月給百円を支払う等、大した問題ではなかった。

それにしても月給百円は破格である。小学校教員や警察官の初任給は八円程度、高等文官試験に合格した公務員でも四十円から五十円程度ではないだろうか。

堀が私を入社させたのは福澤先生の尽力へのお礼であると共に、保険の意味もあったのではないか。福澤先生の娘婿である私を自分の手元に置くことで、福澤先生の影響力を有効に利用できるかもしれないと考えたのだろう。だから保険料込みの破格の待遇で迎えて

くれたのだ。

四月に私たち夫婦は北海道へ出発した。横浜から薩摩丸さつままるに乗船

し、函館はこだて經由で小樽おたるへ向かう。

新婚旅行を兼ねていたので特等客室を予約した。ところがトラブルが発生した。私たち夫婦が使用するはずの特等客室が別の客に割り当てられていたのだ。

私は、ふさの手前、恥をかかされたと思い、客室係に猛烈に苦情を申し立てた。

すると私たちから特等客室を横取りしたのは、なんと堀社長だったことが判明した。堀は、夫人同伴で私たちと同じ船に乗っていたのだ。そのため船会社が気を利かせたのか、私たちを無視して特等客室を堀夫妻にあてがったというわけだ。

社長とはいえ、これは許せない。私は、ますます抗議の口調を激しくした。

北海道炭礦鉄道に入社することが決まった際、私はすぐに堀の東京の自宅を訪問し、お世話になりますと挨拶あいさつをした。

これは社会人として当然のことだ。しかしその時の印象では、私のことをそれほど重んじているとは思えなかった。

福澤先生に上手く取り入り、その娘婿に収まった軽薄な男という程度にしか見ていないように思えたのである。

実際、その通りであるから、仕方がないと言えばそうなのだが、私はこの一件を利用できないかと考えた。

トラブルは、何も悪いことではない。それを解決することで名を上げることができるし、揉めた相手とそれを契機に深く付き合うようになることもある。

それに加えて、私は二年間という短い期間であったが、アメリカの風俗に馴染なじんできた。かの地で多くの社会的地位の高い人物と親しく接してきたが、彼らはおしなべて自己主張が強い。とくに不当な扱いを受けた場合に強くなる。たとえ相手が政府の高官であろうと、大統領であろうと、自分の正当性をきちんと主張し、相手に伝えるのだ。その方が、評価される。

私は、これには感心した。日本人は、相手の地位が高いと、それに気後れし、あるいは周囲の目を気にして、自分が不当に扱われても曖昧あいまいな笑みを浮かべるだけで何も主張しない。せいぜい陰で、相手の不当、自分の正当を愚痴ぐちるだけだ。これが果たして大人の対応と言えるだろうか。このような対応は、いわゆる負け犬の遠吠えのごときものである。

私は、とことん自分の正当性を主張してみることにした。

おそらく堀は、自分が割り込んで特等客室を確保したなどとは知らないはずだ。客室係が、勝手に私と堀とを比較して、堀の方が

社会的地位が高いため、特等客室を利用させるといふ判断をしたのだ。これには当然、私が堀に特等客室を譲るのを承知するとの判断も働いたはずだ。まさか私がこの不当な扱いに抗議するとは想像すらしなかつただろう。

「特等客室は私たち夫婦が予約したのである。堀社長夫婦に譲る言われはない」

私は、客室係に静かな口調で言った。この方が私の怒りが伝わる  
と考えた。

客室係は、これ以上ないほどの苦悶くもんの表情を浮かべ、「その通り  
なのですが……」と呟つぶやいた。

「その通りなら、私たち夫婦の利用を認めなさい」

「なんとかありませんでしょうか」

客室係は、手こそ合わせないが、懇願こんがんする態度がありありだ。

「ならない。すぐに特等客室を私たちに譲りなさい」

私は断固として主張を取り下げない。

隣でふさがおろおろとしている。どうしたものかと動揺している  
のだ。

「何とかお願いします」

客室係が土下座をせんばかりになった。

「私が堀社長に直接話そうか？」

「それは勘弁してください」

「君では埒らちが明かない。船長を呼びなさい」

「申し訳わけございません」

客室係は、ただただ謝るばかりだ。

「桃介君、もういいではないか」

脇から私に声をかけてきたのは、同じ会社に勤める友人だった。たまたま船に乗り合わせていたようだ。

彼の隣には、船長の姿もある。

「おお、君もこの船に乗っていたのか」

「そうだ」

友人は渋い顔だ。

「不当な扱いを受けたことに抗議している。私が先に予約していた特等客室を、私に無断で堀社長に変更してしまったというのだよ」

「トラブルの内容はわかっているさ。傍で聞いていたからね。君の主張は全面的に正しい。堀社長の割り込みは、横暴だ。非難されてしかるべきだ。しかしそれは堀社長のあずかり知らぬところで起きたミスミステイクかもしれない。そこで君がこの主張を押し通して、堀社長をへこましても誰がやんやの喝采かつさいを浴びせると思えるかね。ましてや君は北海道炭礦鉄道の新入社員だろう？ 生意気な、世間知らずだと顰蹙ひんしゆくを買うだけだ。新婚旅行の君たちにとって特等客室

は重要だと思うが、ここは堀社長に譲ったかどうか。堀社長に意見を言いたいなら、仕事でいくらでもそんな機会はあるだろう」

友人は、切々と私に言い聞かせた。隣の船長も、私にやり込められている客室係も、そしてなによりもふさも、友人の言葉に、まるで救いの神が現れたかのように安堵あんどしている。

「わかった。君の意見に従おう。しかし私が主張したことは、堀社長に伝えておいてほしい」

「承知した」

友人が軽く頷うなずいた。

客室係が、安堵のため息を吐くのが分かった。私は、客室係の手を取って握手をし、私たち夫婦の客室への案内を請うた。

後日、この話は友人から、あるいは船長からかもしれないが、堀に伝わったようだ。堀は、私のことをなかなか気骨のある人物だ、さすがに福澤先生の婿殿であると感心していたらしい。

しかし、それは表向きのことだろう。私としては、自分の存在を認識させるためにも、この船室トラブルを利用してはったりのひとつも嘔かましてやろうと思ったのだが、上手うまく行ったのか心もとない。堀は、本音では福澤先生の威を借る生意気な奴だと思ったのではないだろうか。

札幌の本社では炭礦課に配属された。技師長、支配人、副支配人、技師、手代、てだい、こいん、雇員、嘱託、小使いなど総勢二十名の課である。

私はいきなり副支配人格での配属だった。副支配人ではないのだが、それと同格である。新入社員なのに百円もの月給を支給されているのは私くらいのもので、同じ慶應義塾出身者でも月給は世間並みの三十円程度だった。

炭礦課の社員たちは、私の高給と福澤先生の娘婿であることを承知していた。そのため課員の中では、どこか浮いたような立場で、私はいあまり居心地がいいとは言えなかった。

実は、私は、あまり働きは期待されていなかった。堀にしても幹部たちにしても、福澤先生の手前、大切にお預かりするという態度だった。

しかし私は、そんな立場に甘んじることなく熱心に働いた。なにせアメリカで鉄道業務について実地での経験を積んできたのは私だけだから、余計に張り切ったのである。

私は、アメリカの最先端の鉄道業務の知識を駆使して率直に意見を述べた。例えば線路を複線化することによる効率化などだ。



ところが……。

「あの桃介っていうのは何者だ。アメリカ帰りらしいが、生意気な奴だ」

技師や雇員が囁き合っているのが耳に入った。

「どうせ腰掛みたいなもんでしよう」

「そうだろうね。やたらカッコつけちゃって、嫌な奴だ」

「飲みに誘っても、来ないんですよ」

「そうなのか？ 付き合い悪い奴だな」

彼らが私の悪口を言っているのは承知している。私は、ふさと一かを構えたばかりだ。ましてやふさは、全く知人も友人もない札幌の暮らしを始めたのだ。頼りにするのは私だけだ。だから私は、彼らの誘いを断って、仕事が終わればまっすぐふさの待つ我が家に帰ることにしている。

彼らはまるで習慣のように仕事帰りに茶屋に行く。アメリカでは、まず家庭が第一だった。私は、なにもアメリカが全ていいとは思わないが、彼らはあまりにも茶屋に寄り過ぎではないか。そこで酒を飲み、愚痴をこぼし、その挙句に女と遊ぶ。これでは月給がいくらあっても足りないだろう。

堀も船室トラブルの一件では、私のはつたりを好意的に受け止めたようなことを言っていたが、私の提案をことごとく無視するとこ

ろを見れば、あまりよくは思っていないのだろう。

私の提案は全て却下され、なおかつ陰口をたたかれ、出る杭を打つかのとき態度に、つくづく会社勤めは嫌なものだと思った。

しかし福澤先生の立場もある。私は、堀に認められ出世しないと話にならないと考え、周囲のことを気にせず仕事に邁進まいしんすることに決めた。

昔、塾仲間と出世には何が必要かと議論になったことがある。

「出世には運、鈍どん、根こんの三つが揃わないとな」

「運は必要だな。天下の渋沢栄一は運の賜物たまものだ。若い頃は、高崎城の襲撃を計画し、そこから仲間を集めて横浜の外国商館を焼き討ちしようなんて物騒ぶつそうな計画を立て、実行寸前だったんだ。それを親身になって止める人がいたために断念した。もし断念していなければ首を刎はねられていただろう。まさに運そのものだ」

「岩崎彌太郎やたろうだって運がいい。地下浪人じげろくにんの家に生まれたのに藩主の山内家に認められる運がなければ、三菱商會みつびしは生まれなかった」

「そう考えると何事も最初の運が大事だな。その最初の運を掴つかみ取って、その後、それをどう生かすかだ」

「その通りだよ。運命の女神は何度も微笑んでくれるとは限らない。一度の微笑みで運を掴んで、それを離さないことだな」

私は黙って彼らの議論を聞いていた。川越の水のみ百姓の家に生

まれた私が、有力者の支援で慶應義塾で学んでいるのは、運を掴んだからだろうか。この運を大事にしなければ次がないのだろうか。

「では根とはなんだ？」

「根気のことだよ。何事もコツコツとやらねばならないってことさ」

「どんな嫌な目に遭おうと、くだらない仕事であろうと、陰ひなたなくコツコツと務めるってことか」

「コツコツと務めるのはなかなか簡単ではない。くだらない仕事を文句も言わずにこなしているうちに精も根も尽き果てるに違いない。俺には無理だな」

私も会話に加わる。

「俺も無理だ。生来、根気がない」

実際、私は飽きっぽい性格である。同じことをし続けたり、同じ場所にとどまり続けることは苦痛でしかない。

「安田善次郎は千里の道も一歩から、ちりも積もれば山となる、をやすだぜんじろう実践し、大成功を勝ち得た。掴んだ運を逃さないためには根は重要だ」

「では最後の鈍はどうか？ 鈍けりや出世などおぼつか覚束ないだろう」

「あまり才走るなということだろう。多少、鈍いように見せておかねば、上司も可愛がろうという気にならないからな」

「そうは言うものの、どのタイミングで本当は鈍くないと見せるかが難しい。鈍に見せているうちに本当に鈍になってしまう可能性が高い。桃介はどう思う？」

「俺なんか、悪さばかりして福澤先生に叱られてばかりだ。それも鈍の一つなのかなあ。もしそうなら俺は鈍だな」

私は答えた。

結局、この議論はまとまることはなかった。出世するには「運鈍根」の三要素が必要だが、それだけでは不十分なのだろう。その三要素が上手く絡み合うためには、もう一つ何かが必要なのだ。

渋沢も安田も岩崎もなぜ大成功を収めたのかは、誰にも明確な回答を出すことはできない。恐らく本人にも、だ。

時代の風も彼らの背中を押しただろう。彼らは、一度掴んだ運を決して手放すことはなかった。人の何倍も努力をしたことだろう。

そこで彼らを模倣したとしても成功するとは思えない。私は、彼らとは違うからだ。これは自明のことだ。しかし多くの人は、成功した彼らと同じようにすれば自分も成功すると思いがちだ。

私は、私なりの方法を見つけなければならぬ。それが「運鈍根」にプラスするもう一つの何かなのだろう。

その何かを掴むために、他人の陰口など気にせず北海道炭礦鉄道で一生懸命に働くことにした。百円もの月給をもらっている以

上、それに応えねばならない。それが義務であり、責任だろう。

「会社勤めはいかがですか？」

差し向かいで夕食を食べながら、ふさが聞いた。

今は、ふさと家政婦と一緒に暮らしている。夫婦と家政婦が住むには十分な広さの社宅であり、庭もある。

札幌は東京のように賑やかでないため、ふさが寂しがるのではないかと思つたが、ふさは庭いじりをしたり、乗馬を習つたりと充実しているようだ。

ただしふさは福澤諭吉の娘であるというプライドが強く、養子の私としては時折、それが鼻につくこともあるのだが……。

「一生懸命働いているが、詰まらないね」

「詰まらないのですか？ どうしてでしょうか」

ふさの顔に不安が浮かんでいる。

「私はね、米国で鉄道を学んできた。それを生かせると思い、先生の推薦もあつて北海道炭礦鉄道に入社したんだ」

「そうなのですね……」

「先生に恥をかかせるわけにはいかないから、私は一生懸命働こうと思つていた。するとだね、なぜ働くんだという顔をされる。先生の推薦で、まして養子に入っているなら何もしなくても給料をもらえ、出世もできるのにといい態度だ。私が働くのが目障りなんだ

ね。皆、働かないからね」

「あら、まあ」

ふさが目を見開き、驚いた。

「アメリカの会社では、社員たちは力を合わせて一生懸命に働いていた。それを見ている私としては、なぜ皆、働かないんだと腹が立つよ」

「なぜ働かないんでしょう？ できたばかりの会社だと聞いています。そうであれば働かないと上手く行かないのはありませんか」

「ふさの疑問は、私の疑問でもある。堀社長の目が行き届いていないだね。皆、終業時間になると、逃げるように会社を出て行く」

「早いご帰宅ですね」

「そうじゃないさ。皆で誘い合って、茶屋、お座敷通いさ」

社員たちは、毎晩、芸者や酌婦がいる酒席へと出かけていくのだ。それは呆れんばかりの熱心さで、その力をほんの少しでも仕事に振り向けたらと思うのだが……。

「お座敷って女性がいるんでしょう？」

ふさは困惑している。

私は、にやりとした。

「そうだよ。皆、酒と女性を目当てにその店に駆け込むんだ」

ふさの眉間に皺みけんが寄しわった。不愉快な気持ちになっているのが明らか

かだ。

「嫌ですね」

「本当にそうだ。どうしてこの国の勤め人は仕事が終わっても家に帰りがらないのだろう。アメリカではそんなことはなかった。

皆、仕事が終わると、まっすぐ家に帰って家族と夕食を共にする。

それが普通だから、私は驚いたね」

「それが当然だと思います。父は、いつも私たちと一緒に食事をしました。家族が一番大切だと言っています」

「先生のおっしゃる通りさ。だから私は、まっすぐふさの下に帰って来るんだ」

私の言葉に、ふさが笑みを浮かべた。

「嬉しく思います」

「でもね、同僚との付き合いが悪いと変わり者扱いさ。仕事を熱心にする、茶屋にはいかない。だから変わり者扱いなんだよ」

私は少し困った顔をして見せた。

「いいじゃありませんか。このまま変わり者でいてください」

ふさが私の隣に移動し、身体を預けた。私は、彼女の細い肩に優しく手をかけた。

「私は、初めて勤め人になった。だから戸惑うことも多い。だけどね、ここで勤め人としての心構えを学ぼうと思う。仕事は詰まらな

いことが多いけど、それが人生修行だからね」

「あまりご無理をなさらないでください。私にとって頼りになるのは桃介さんだけなのですから」

ふさが私の腕の中で囁く。私は、強くふさの身体を抱いた。ふさのことを愛おしく、可愛いと思った。家族から離れ、私と共に北海道についてきてくれた。東京にいれば何不自由ない暮らしだったにもかかわらず、うらさびれた北の果てで暮らすとは想像だにしていなかったに違いない。東京で暮らしていれば、どうしても福澤先生の影響を感じざるを得ないが、この北の果てでは、守る人と守られる人という男女の純粋な関係になった気がする。

ふさを抱く腕にさらに力を込めた。

「痛い……」

ふさが呟いた。

私は、ふさと夫婦になったという思いに深い感動を覚えていた。

#### 4

私は、同僚の冷たい視線をもともせず働いた。

生来、働き者なのである。確かに奇矯ききょうな行動をしたり、目立ち

たがり屋の一面はある。そのお陰で福澤先生の目に留まって養子に



なることができた。

しかし、コツコツと努力を重ねる人間でもあるのだ。慶應義塾でも遊び人のように思われながらも、学業の成績は決して悪くなかった。いったい桃介はいつ勉強しているのだと不思議がられたこともある。人が起きている時には、あえて遊びまわり、人が寝ている時には、必死になって勉強をする。それが私なのだ。

せっかく勤め人になった以上は、勤め人の心得をしっかりと会得することにした。詰まらない仕事、なくても誰も困らない仕事だと判断するには、まずそれをやってみてからだ。それをどのように人生に生かしていくかは、またじっくりと考えよう。

私は出世したいと思っている。それは福澤先生から自立をしたいからだ。このことは先生の訓えおしに矛盾むじゆんするものではない。独立自尊そのものである。

私と同様になんら後ろ盾のない若者は多いことだろう。富貴な家に生まれた者は、最初からスタートラインがずっと先に設定され、そこから走り出すことができる。だから無理に出世などということはない。これは大いなる社会的矛盾である。同じ努力を重ねても、そうした者は当然、早くゴールインするに決まっているのではないか。私のような貧しい生まれの者は、富貴な生まれの者が立っていたスタートラインまで到達するのが大変なのだ。そこに

辿り着くまでに疲れ果ててしまう。こんな世の中を何とか変えたいと思う。

福澤先生も渋沢栄一も、そう思ったに違いない。先生は下級武士の生まれだった。そのため学問をすることで富貴の仲間入りを果たした。渋沢栄一は農民の出身であるが、徳川慶喜や大隈重信などに懸命に仕えることで道を切り開いた。

世に出たいと思うなら、その場、その場で与えられた機会を無駄にせずに徹底して仕事をすることだ。それが道を切り開くことにつながるのだろう。

私は、同僚からの冷たい視線を気にせずに働くことにした。しかし彼らの視線を無視するわけではない。こちらが無視すれば、向こうはもっと無視してくる。反目が大きくなるだけである。それでは仕事に支障が出てくる。

まずは同僚社員、上司の性質を知らねばならない。なぜか？ それは彼らに気に入られなければならないからだ。

勤め人を続けるにしても独立するにしても、相手に気に入られ、引き立てられなければ成功は覚束ない。一人の力だけで出世はできないからだ。

私は、同僚に会うと、気持ちよく挨拶あいさつをすることから始めた。すると面白いもので、茶屋通いをしない私を変人扱いしていた同

僚たちの私を見る目が、徐々に優しくなってきたのだ。

彼らは相変わらず仕事は熱心ではないが、それぞれに趣味がある。人は皆同じではない。こんな単純なことを知ることができただけでも良い。

ある人は、芝居好きであり、ある人は囲碁好きである。まさかそれぞれに付き合うわけにはいかないが、趣味の話題にわずかでも参加するだけで、その人の気持ちを捉えることができる。

ある時、いつもは陽気に話しかけてくる同僚が、暗い顔をしていた。気持ちが極端に沈んでいるようなのだ。

私は気になって「どうかされたのですか？」と聞いた。

同僚は、いかにも疲れ、やつれた顔で「娘の具合が悪いんだ。心臓だよ。いい病院を探しているんだが、なかなか見つからなくて

ね。費用もかかるし……」と言った。

家族の病気ほど、辛いことはない。ましてや父親として娘の具合が悪いとなればなおさらである。

「私に帝国大学医科大学の知り合いがおります。娘さんをそこに入院させましょう」

私の強い口調に、彼の表情が一瞬、明るくなったが、すぐに元のようになんて暗くなった。

「そんなところ入院させる、これがないよ」

彼は親指と人差し指を曲げて合わせ、金を表した。

「そんなもの、なんとかあります。社長に出させればいい。私が掛け合います」

彼の手を強く握ると、顔に赤みが差した。希望の灯が点つただ。

私は、すぐに動いた。帝国大学医科大学の知人に連絡し、検査入院の了承を取り付けた。そして社長の堀に掛け合い、同僚の娘の入院費用について会社負担を了承させた。

私は堀に、「二人の社員が喜べば、その何倍もの社員が喜びます。それが会社の喜びになります」と説得した。

堀は最初、渋っていたが、私の背後に福澤先生の姿が見えたのだろう。渋々ながら了承したのである。

同僚が娘と一緒に船に乗り、東京に行く際、私や多くの同僚が見送りに駆け付けた。

「ありがとう、ありがとう。この恩は一生、忘れないから」

同僚は、私の手を握りしめ、涙を流した。

「いい結果を期待していますよ」

私は笑顔で言った。

私の背後に並んだ同僚や上司たちの拍手が港に鳴り響いた。

彼のために働いたことで、同僚や上司の私を見る目が以前とは違

ってきた。皆の目が温かくなったのである。

人に寄り添うことで、人が私にも寄り添ってくれる。人への親切は、欲得なく行う。こんな真実を理解することができた。

私は新入社員として客を訪問する際にも工夫を凝らした。

初対面の人と会うためにはどうしたらいいのか。闇雲やみくもに訪ねて行っても、私のような軽輩に取引先の社長など重鎮が会ってくれるところは、まずない。

当然のことだが、まず彼らと会うには、彼らが在席し、時間に余裕がある時を選ばねばならない。ところが、それがわからない。早朝がいいのかと思えば、早朝から忙しくしている人もいる。食事中なら必ず会えるだろうと思うのだが、それは不躑ぶしつげというものだ。

そこで私は、秘書や受付担当と親しくすることにした。将を射んと欲すればまず馬を射よ、である。秘書や受付担当に頻繁に声をかけ、「今日は社長はお忙しいですか」「今日は暖かいですね。これちよつと珍しいお菓子です。皆様でお召し上がりください」と無駄足覚悟で訪問する。そして「社長によくお伝えください」と名刺を置き、「また参ります」とその場を辞するのだ。これで秘書や受付担当は私の味方になってくれる。

手土産は頻繁に持参しなくてもよい。そんな費用をかけることはない。必要なのは、世辞せじである。愛想である。それらは費用がかか

らない。笑顔で、「こんにちは」と言うだけで、秘書も受付担当も私のために「なんとかしてあげよう」と思い始めるのだ。

多少時間はかかるが、これが最も成功率が高い。

肝心なのは、ようやく社長に会えた時だ。その時の態度が重要になる。たとえ相手が自社より小さな会社であっても、決して尊大な態度をとってはならない。福澤先生の威を借りてもならない。それらは禁物である。

応接室に通された際、私は、社長が来るまで決して椅子には座らず、運ばれてきた茶にも手を付けない。

社長が入ってくる。立ったまま待っている私を見て、ちよつと驚き、そして笑みを浮かべる。誰もそんな形で自分を待っているのに出会ったことがないのだ。大会社や官営企業の社員は、尊大にもソファに腰かけ、社長が入ってくるのを待っているのが普通だ。しかし私は、謙虚な態度を示した。それが社長を驚かせたのだ。

「どうぞ、お座りください」

「ありがとうございます」

社長に座るよう勧められても、私は社長の動きに視線を注ぐ。そして社長が椅子に腰を下ろしたのを確認してから、私も座るのだ。

たったこれだけのことで社長の心をぐつと掴むことができる。北海道炭礦鉄道の社員で、私のような気遣いをする社員はいないから

だ。社長は私のことを気に入り、商談はスムーズに進むのである。

人は面白い生き物である。他の人から認められたいと、どんな立場の人も思っている。そして認められると喜びを感じるのだ。私は、たとえ相手が小さな企業の社長であつても、敬い、尊敬し、謙虚な態度で臨むようにした。これが社長の心を掴むのだ。

そして具体的な商談に入る際には、初対面では長居はしないこと、そして相手に多く話させること、この二点が重要である。

せっかく謙虚な態度を示して社長の心を掴んだのに、べらべら、だからだと自分の用件だけを話し続けると、相手はうんざりする。親しくなれば、長居をして冗談を言い合うこともいいだろうが、初対面では悪印象を与えることになる。手短に自分の用件を伝え、後日、まとまった時間をいただけないと頼み、その場を辞するのが良い。相手は、なるときびきびとした気持ちのいい人物だと思うだろう。

長居して、なれなれしくするのは、富士山を遠くで観れば秀麗だが、近くで観ればゴツゴツとした岩場ばかりで美しくないのと同様である。長居をすれば、欠点がすべて顕わになってしまうだろう。

さらに重要なのは、相手に多く話させることだ。聞き役に徹することである。

これは福澤先生から学んだ。先生は、聞き上手である。

通常、先生のように人々を指導する立場にある人は、とかくおしやべりである。自分のことを話したがる。

ある時、先生のところへ郷里の老人が訪ねてきた。特に込み入った用事があるわけではなかった。老人は、先生に会うと、くどくどと長時間にわたって昔話をした。先生は、老人に向き合って笑みを浮かべ「なるほどね」「ああ、そうですか」「ほほう、それからどうされました」と合いの手を入れて話を聞いている。

老人は、十分に話したと見え、「今日は、お忙しいところをお付き合いただきありがとうございます」と満足な様子で帰った。

「先生、お時間のないなか、どうしてあのような老人に時間を使われたのですか？」

私は聞いた。

「人と言うのは、自分の胸の内を聞いてもらうことで満足するものなのだ。どんな時でも一方的に自分の意見を話すだけではいけない」

「私たちは自分の意見を主張するように教えられましたが」

「自分の意見を主張するのも正しいが、その前に相手の話の耳を傾けるのだ。世渡りするには聞き上手でないといけない。君が耳を傾ければ上司は君を素直な人物だとかわいがるだろう。部下は、私たちの意見を聞き入れてくれる良き上司だと、仕事に対するやる気



が起きるものなのだよ」

私は、聞き上手の教えを実践した。

社長に会った際、手短かに用件を伝え、「ぜひ、あなた様の<sub>(ご)</sub>意見を拝聴したい」と下手に出るのだ。すると必ず相手は嬉しそうな顔をして持論を話し始める。このようにして関係を深めていくのである。

北海道炭礦鉄道の仕事は、けっして楽しいものではなかったが、勤め人としての修行にはなっていた。

ある夜、食事の後、ふさが再び「お勤めはどうですか？」と尋ねたので、「人間観察にはもってこいだ」と答えた。

ふさが怪訝<sup>けげん</sup>な顔で「どういう意味でしょうか」と聞く。

私は笑いながら、「それらしく振る舞うことが出世の道だということさ」と答えた。

それでもふさはわからないらしく、首を傾げている。

「私は、仕事が早いんだ。やるべきことをやってしまい、ぼんやりとしていたら上司が仕事をしていないのではないかという疑いの目で見ると。それで周りを見てみると、出世の早い連中は、仕事があるうがなかるうがやっている振り、忙しい振りをしているんだ。まったくくだらないことだけど、見せかけだけ忙しくしているんだね。こんなことではいけないけど、そういう風に見せかけるの

が出世の近道だと悟ったのさ。それらしく振る舞うことがいいってことさ」

私の話に、ふさは少し笑った。

「そんな人ばかりなら会社は上手く行かないでしょう？ 呆れましてわ」

「まあ、そうだね。皆、仕事をしている振りばかりじゃ会社は潰れてしまう。でも潰れないのは私のようにちゃんと仕事をしている社員が何人かいるからなんだ。本当に仕事をする社員だけにすると、会社って少人数で回すことができるかもしれない」

「堀社長は、仕事をしている振りの人を出世させておられるのですか？」

「そうなんだよ。そういう連中は、社長へのお追従ついでだけは熱心だからね。社長の目を曇らせることに全精力を注いでいるんだ。それはたいしたものさ。だけど、もし私が社長になれば本当に仕事をする者だけにしたいと思っている。その仕事も、私らしく楽しいものにしたいいね」

私は、初めて自分の夢を語った。

ふさは嬉しそうに、「期待しております」と言った。

ふさの妊娠がわかったのは、その翌日のことだった。